

ふるさとの風景を再発見する

事業代表者：雑草と里山の科学教育研究センター・准教授・西尾 孝佳

協力者：一般財団法人里山大木須を愛する会

1. 事業の目的・意義

高齢化・過疎化が進む里山では耕作放棄や森林の荒廃が著しく、いわゆる「ふるさとの風景」が大きく変化した。本事業では、ふるさとの風景とは何か、それはどこに残るのか、何がふるさとの景色を悪くするのか、どうすれば本来の景色を取り戻せるのかについて、那須烏山市大木須地区の地域住民との交流を通じて考察する。



写真1. 人里を覆い尽くす勢いで広がるクズ（マメ科つる性植物）の新芽

2. 事業内容

(1) 自然の実りを特徴付ける風景の観察

これまでの住民との対話のなかに、雑草やつる植物が広がる里山では花が少ないという声をよく耳にした。本事業の対象地域である那須烏山市大木須地区では在来種であるニホンミツバチの養蜂に取り組む住民がおり、その住民たちはミツバチの行動圏に花が少ないために（蜜源が少ないために）、地域内で飼育できるミツバチの数が制限されることを実感しているようである。そこで本年度の事業では、高齢化・過疎化が進み、人手が限られた条件で、少しでも地域内に咲く花を増やすために、同時に雑草対策につなげるために、自然の実りの積極的な利用による風景の再生に注目し、地域住民及び学生の交流を通じ、その可能性について考察した。里山において多くの植物が芽吹いた2018年4月から6月にかけて、いわゆる山菜として利用される植物、特に成長すると繁茂し他の植物の成長及び開花を抑制する雑草について、参加者とともに、地域内の山地、農地、耕作放棄地、水路などを散策しながら、発生初期段階の識別、新芽等の採集及び調理を行った。



写真2. 採取し実食した植物の例。クズ、ヒナタイノコズチ、イタドリなど里山で繁茂しがちな植物を食す

植物がいつ芽吹き、成長し、開花結実し、枯れていくかは環境に強く影響され、学術的にも興味深い。ここでの観察においては、里山の風景を大きく変質させる雑草やつる植物の発生初期段階が確認できた。

こういった発生初期段階の芽や花などの一部は山菜として利用できるため、毒性などに配慮しつつ、調理や実食も試みた。身近な雑草も名前や特徴を知る機会がない住民にとっては、簡単な調理で美味しく食べられることに驚いていた。新芽以外に、雑草やつる植物の繁茂によって目立たなくなるとも、潜在的に植物種の豊富な里山では多様な花や果実が観察でき、それらを支えるふるさとの自然が持つ潜在力について意見を交わした。例えば、キイチゴ属の植物は液果となる果実が山の恵みとして知られるが、この地域に豊富で味や食感が少しずつことなる数種を食べ比べたこと、どんな条件の場所にそれらが出

現するかについては、住民に興味を持たれた。さらに、私たち人間にとって美味しく食べられ、栄養となる植物は野生動物にとっても魅力的な餌資源になり得ること、それらと野生鳥獣被害との関係についても、意見を交わした。

(2) 地域の思いをつなぐ風景画像コンテンツの収集

これまでの住民との対話において、「ここも昔は見渡す限り水田が広がっていたんだ」、「今は行けないけど、昔はあの山の上で子供たちが遊んでいたんだ」などといった話をよく聞いていた。こういった話は、



写真3. 集落からそれほど離れていないが、雑草に覆われて道も分かりにくい場所にある裏山。この山の山頂部は子供たちの遊び場だったらしい。山頂部はアカマツ林でやや平らな場所がひろがっている

今現在、私たち（外部から訪問する）が見る風景は地域に長く暮らす住民とは見え方が異なることを示すと推察され、「ふるさとの風景を再発見する」といった事業を進めるため、風景の成り立ちの本質を知るためには、地域の風景を記録した情報の整理が必要となると考えた。

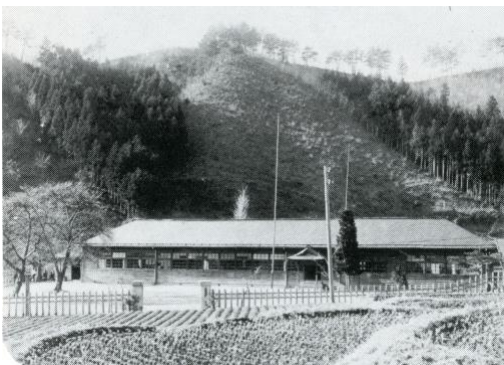


写真4. 現在のオオムラサキ公園はもともと大木須小学校の跡地。裏山の様子なども現在とは異なる

そこで今年度から地域住民の方々に、家庭等で撮影した写真の提供をお願いし、ふるさとの風景の変遷を地域内外に伝える取り組みを始めた。

現在のようにカメラの所有や写真撮影が一般的でなかった1960年代以前に、地域内の風景を撮影した事例は限られていたが、当時の風景を推定しうる写真も何点かお借りできた。



写真5. 昭和30年頃の集落と裏山の風景

3. 事業の進捗状況

幅広い年代層の住民の方々に興味を持ってもらうために、ふるさとの風景を考えるための情報収集に重点をおいて事業を実施した。風景の構成要素となる生き物の情報は、地域住民のほか、地域のシンボルとなっているほたるの里古民家おおぎすのスタッフや学生によって収集されつつある。また、現在の情報のみならず、「昔はこんな生き物がここで見られた」、「ここにはこんな風景がひろがっていた」といった住民からの口コミ情報も収集している。地域の風景を記録した映像の収集については、宣伝不足などによって一部の住民からの情報に限定されてしまった。

4. 事業の成果

住民はふるさとの風景が変質している状況を認識しているが、そういった状況をどう理解すべきかについては十分ではない。しかしながら、「手入れ不足で荒れる里山」と形容されても、いまだ里山の恵み

は自然のなかに豊富に存在すること、そんな恵みを食材として利用できることを知ったことは、地域住民の方々がふるさとの風景のあり方を考える糸口になったと期待される。また、地域住民への古い写真の提供依頼においては、古いアルバムを見返す面倒はかけたものの、昔の風景に思いをはせる機会を提供できた。

5. 今後の展望

多くの里山では、高齢化や過疎化の進行によって、人里の自然への手入れが停滞して、雑草の繁茂や野生鳥獣被害の増加に苦慮している。いくら精力的に対策を講じても、勢いが弱まらない雑草や野生鳥獣からの「圧力」に屈指してしまうことも少なくないかもしれない。そういったなか、忙しい暮らしのなかで見過ごされがちな日常の風景が持つ潜在的な魅力を引き出そうとする、また住民に知らせようとする本事業の試みは効果的であると考えられる。

しかし、里山の多様な自然に恵まれた地域であるがゆえに、いまだ情報の収集に終始していて、地域内外のひとたちに得られた情報をフィードバックする仕組み作りが不十分である。

今後は、引き続き様々な形の観察の機会を設けるとともに、住民の方々と協働して、ふるさとの風景を再認識することの重要性を共有し、停滞しがちな雑草管理などに対するモチベーション向上、住民が求めるふるさとの風景の再構築に寄与していきたい。